

広島市中山貝塚出土遺物の資料紹介

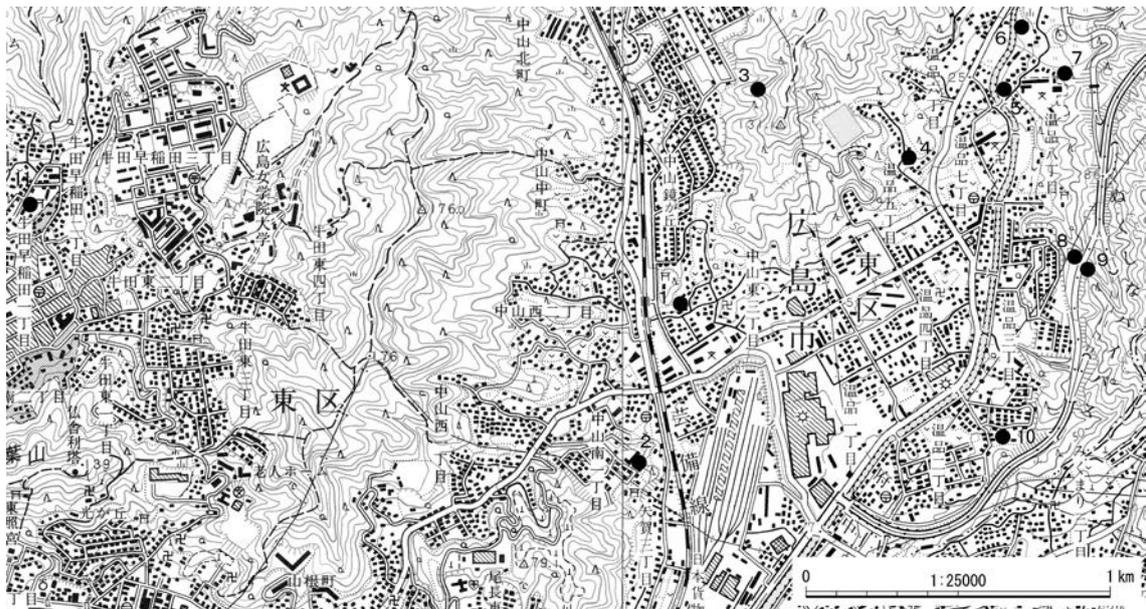
—中山 I 式甕形土器—

野島 永・藤井翔平・市川伯博・森本直人・平尾英希

1. はじめに

中山貝塚は広島市東区にある縄文時代晩期から弥生時代中期の遺物を包含する貝塚である。北西付近に居住域が存在していたと思われるが、現在市街化したこの地域において、その痕跡を見つけることは難しい。1958年の日本考古学協会による発掘調査で出土した考古資料の多くは広島大学大学院文学研究科考古学研究室に保管されている。広島湾岸では数少ない弥生時代前期の遺物を包含する貝塚であることから、詳細な報告書を作成し、遺物の公表をしなければならなかったわけだが、報告書作成が実現しなかった。このため、それら出土遺物の一部でも公開していくことが当該地域の縄文・弥生時代研究の進展とともに、大学院生の調査研究活動の新たな展開のためにも有意義であると考え、不完全かつ未熟ながらも中山貝塚出土遺物を数回にわたり紹介していくこととしたい⁽¹⁾。なお、今回は中山貝塚出土遺物のなかでも中山 I 式（松崎・潮見 1961）を中心とした甕形土器を紹介する。

広島大学大学院文学研究科大学院生の資料実習授業として、2006年以降、中山貝塚出土土器資料600点ほどの実測・トレース・写真撮影・観察表作成などを行ってきた⁽²⁾。以下ではこれまでに実習授業で作成した浄図を使用し、遺物の紹介を行いたい。



第1図 周辺遺跡分布図 (1:25,000)

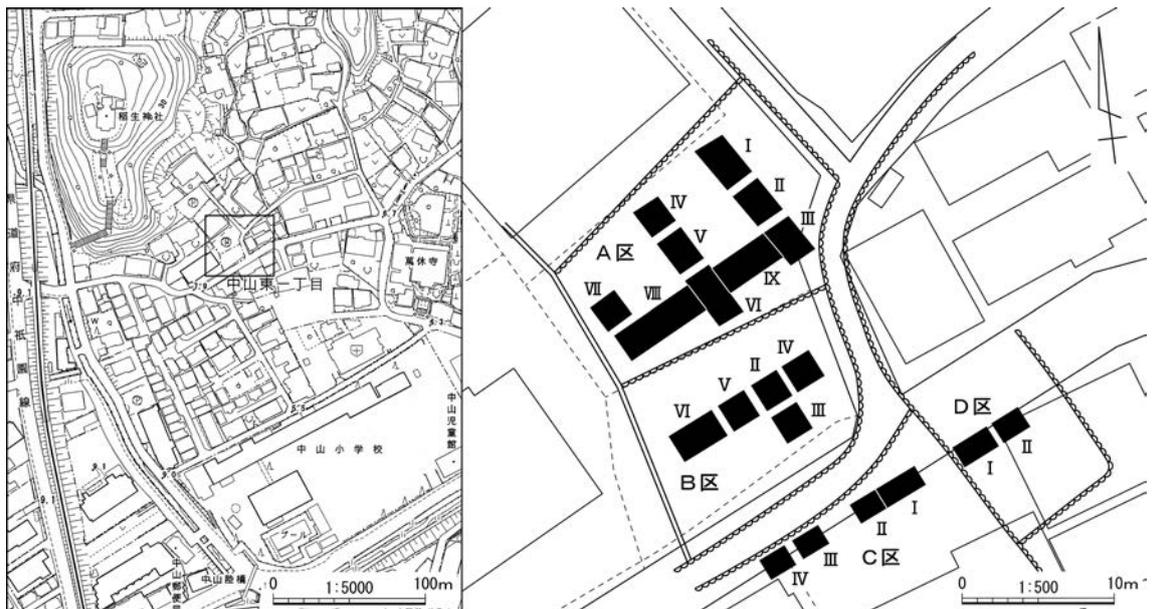
1. 中山貝塚 2. 中山南遺跡 3. 田原ヶ城山古墳 4. 矢田貝塚 5. 森垣内1号貝塚 6. 森垣内2号貝塚 7. 温品中学校貝塚 8. 須賀谷第1号古墳 9. 須賀谷第2号古墳 10. 赤羽古墳 11. 牛田早稲田神社遺跡

2. 中山貝塚をめぐる調査研究

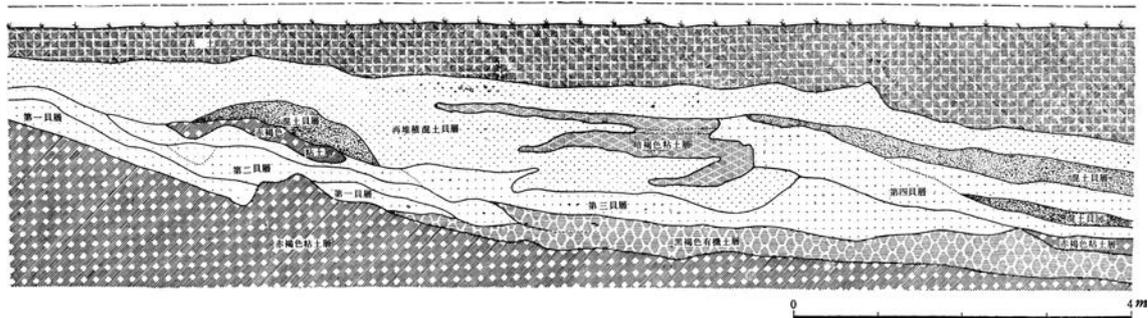
中山貝塚は広島湾の東、現在の広島市東区中山東1丁目に位置する(第1図)。広島市の人口増加に伴う宅地開発の結果、北西丘陵にある中山稲生神社以外、昭和の景観をほとんど残してはいない。調査当時、付近は段々畑になっていたが、畑の区画となっていた石垣もすでにない。

大正年間にはすでに中山貝塚の存在が知られるようになっていた(吉野 1925)。戦後まもなく、1951年5月に広島考古学会による発掘調査が行われた。その後、農業発展と社会進化の相関を見出すために、弥生時代の開始とその展開に関わる日本考古学協会の特別調査プロジェクト(弥生土器文化総合研究特別委員会)が企画され(松崎・潮見 1961)、先述したように1958年8・9月に広島市中山貝塚の本格的な発掘調査が行われた。縄文時代晩期から弥生時代中期までの多様な遺物が出土したが、なかでも出土層位にもとづいて弥生時代前期を2期区分した型式分類(中山Ⅰ・Ⅱ式)はのちの広島県における弥生土器研究の起点となった。一方、最下層から出土した中山B式土器は縄文時代晩期に広がる突帯文系土器群に含まれる地域性の強い土器群と認識された。のちに、岩田第Ⅳ類土器とも関連付けられ(家根 1984)、突帯文土器群の成立に関わり、その所属時期が晩期初頭とされたこともあったが、晩期土器群に後続する一型式として、弥生時代前期初頭に属するといった意見もみられるようになった(妹尾 2000)。

現在、日本考古学協会の発掘調査によるトレンチA区は駐車場、B区はアパート(住宅)になっている。段々畑の地割りと畑の高低差から往事をしのぶしかない(第2図)。稲生神社のある北西丘陵から南東にかけてかなり傾斜しているが、弥生時代当時もA区Ⅷ・Ⅵ・Ⅸ・Ⅲ各トレンチの北西側土層堆積図(第3図北壁)を見れば、北から南に向けて傾斜していた状況がわかる。北西側での生活によって貝層が形成され、それが再堆積していたものと推測でき、居住・活動域が稲生神社付近に位置する可能性が高い。



第2図 中山貝塚トレンチ位置推定図(1958年発掘調査時の平板図と現在の地図とを比較して推定) 広島市平面図(1/2500、広島市より提供)を利用して作成



第3図 中山貝塚A区（Ⅷ・Ⅵ・Ⅸ・Ⅲトレンチ）北壁断面図（1/90、松崎・潮見 1961を一部改変）

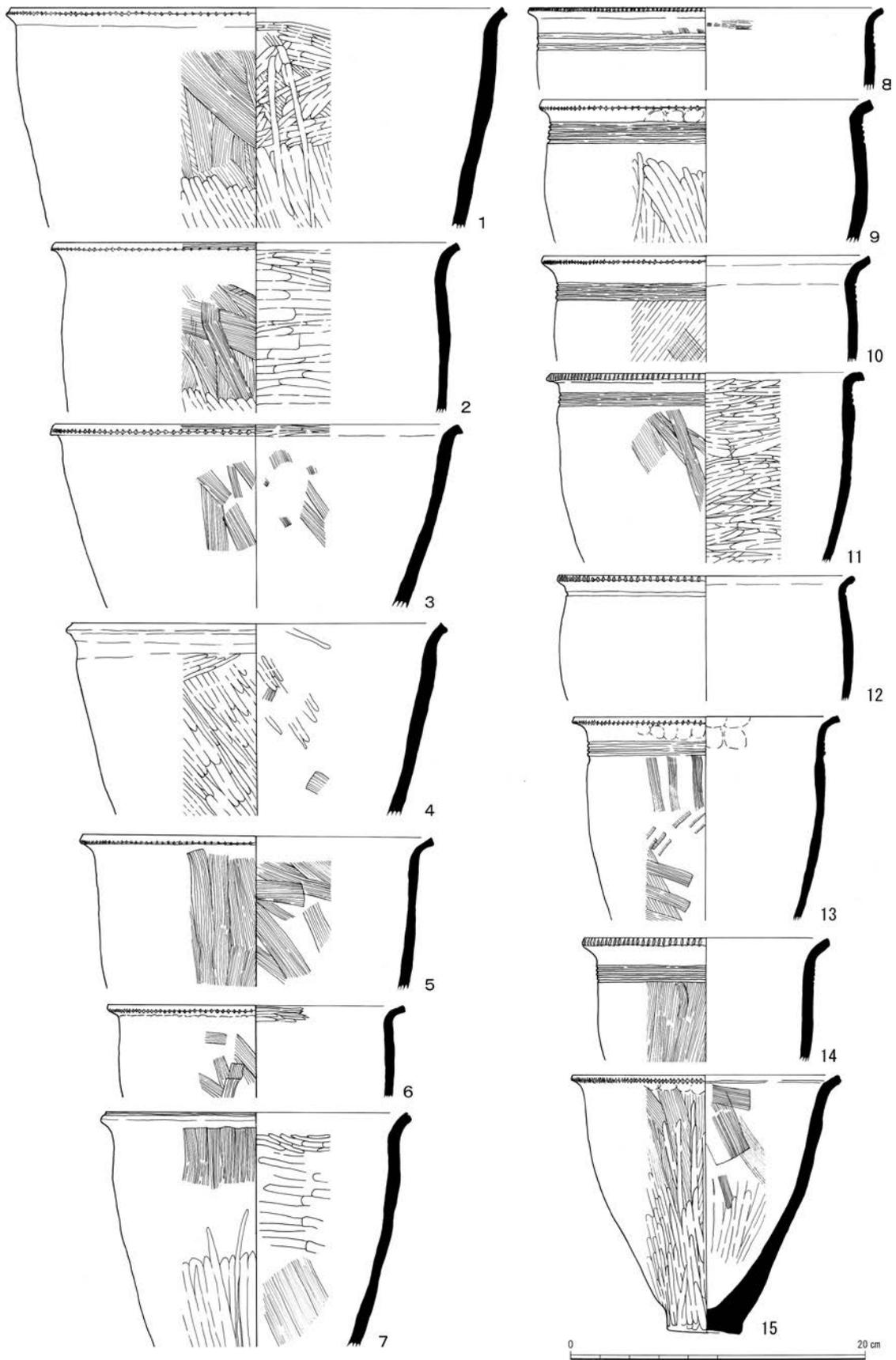
縄文時代晩期前後には、この中山地区の近辺にまで海浜が迫っていたようである。日本考古学協会の特別調査によって検出された5つの貝層（第1～4貝層、第3貝層と第4貝層の間層（再堆積混土貝層）、第3図参照）からは海浜浅瀬に生息するハイガイ・ハマグリ・カキ・アカニシなどの海産貝や汽水域に生息するヤマトシジミなどの貝類がみられた。上層の貝層になるに従ってヤマトシジミの個体数が増加することから、遺跡近辺が次第に陸化してきた様相を知ることができる（松崎・潮見 1961、潮見 1987）。

3. 中山Ⅰ式土器を中心とした甕形土器の資料紹介

今回、資料紹介する遺物として弥生時代前期の土器を示した。潮見浩氏による中山Ⅰ式甕形土器の定義は「深鉢形土器では「く」の字状に外反した口縁端部に刻目がくわえられ、その下に二条から四条の沈線がめぐらされる」（潮見 1987）という簡単な説明しかない。このため、ヘラ描き沈線文がなく、口縁端部に刻目のみもつ、いわゆる遠賀川系甕形土器も含め、口縁下に多条化する沈線をもつ中山Ⅱ式土器出現以前と考えられる甕形土器群をまとめて紹介しておきたい。

今回紹介する土器群はいずれも程度の差こそあれ、口縁部端部が如意型に屈曲する。大型の甕形土器は口縁部端部に面をつくるが、小型の甕では必ずしも端面にならず丸く収めるものもある。多くは端面の下端に下方から工具を押し当てて刻目を施す。11・14のように端面に平行して刻目を付けるものもあるが少数である。なお、内外面の調整技法については観察表を参照していただきたい。

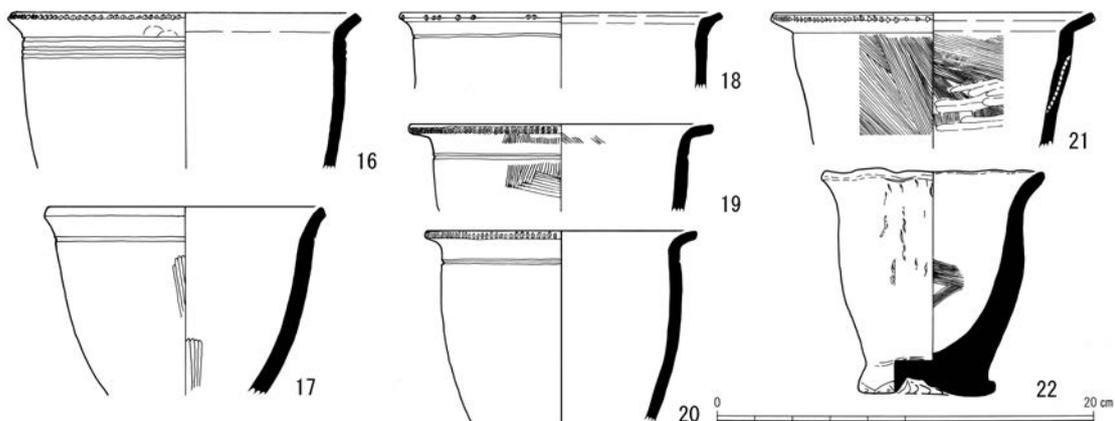
第4図1・2はともに口縁端面の下端に浅い刻目が施される。1は暗茶灰色、2は暗赤褐色を呈し、ともに焼成は良い。3は口縁端面下端に深い刻目が施されるため、下端がやや波状に変形する。にぶい黄褐色を呈し、焼成はとても良い。4は口縁直下を強いナデによって成形する無文のものである。外面にはハケ調整の痕跡はみとめられない。外面は灰褐色、内面は明赤褐色を呈し、焼成は良い。5・6も1・2同様に端面下端に浅い刻目が施される。5の外面はにぶい黄褐色、内面はにぶい黄色を呈し、焼成は良い。6の外面は灰褐色、内面は暗黄灰色を呈し、焼成は良い。7は4と同様に口縁直下を強いナデによって成形する無文のものである。粘土帯の接合部を明瞭に残す。にぶい黄褐色から橙色を呈し、焼成はやや良



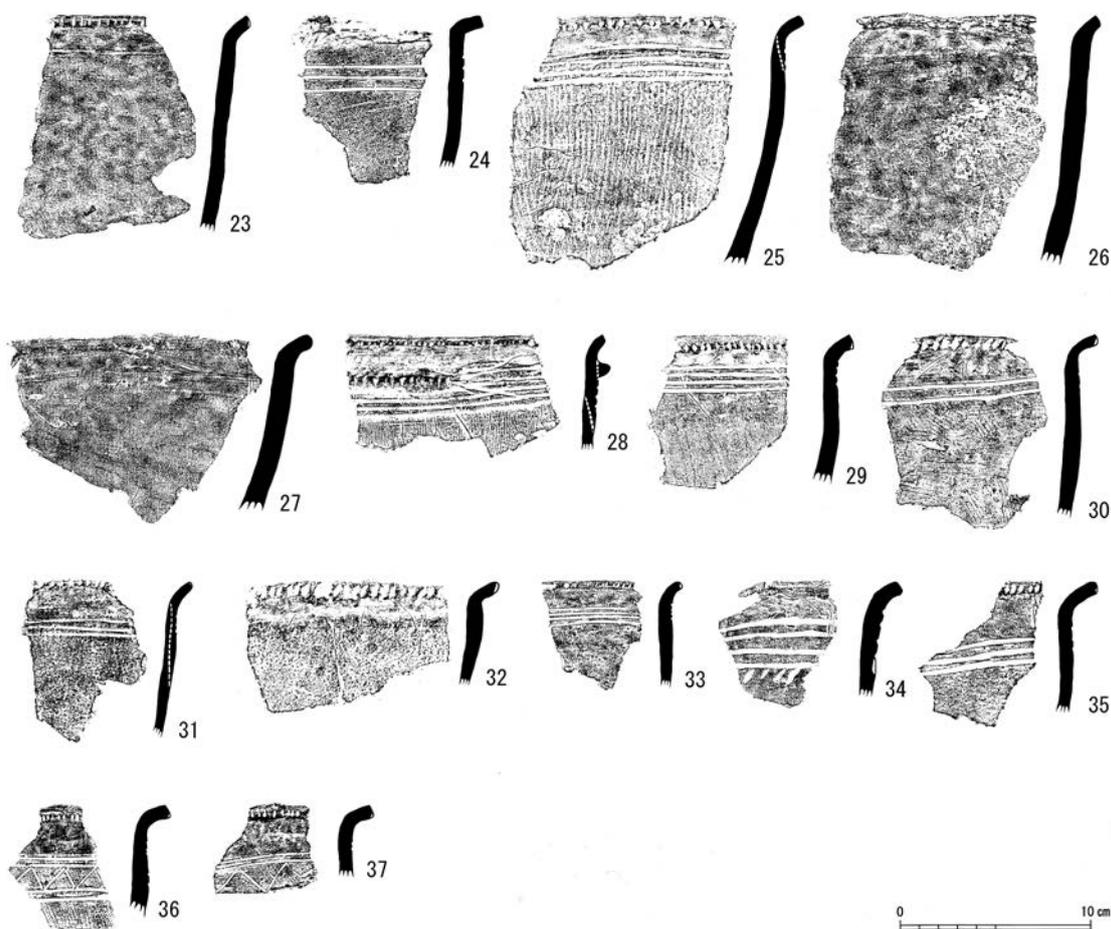
第4図 中山貝塚出土中山 I 式甕形土器 土器番号 1 ~ 15 (1/4)

い。8は口縁部下に3条のへら描き沈線が巡らされ、口縁端面に幅広の刻目が施される。外面は灰褐色あるいはにぶい黄橙色、内面は黄灰色を呈し、焼成は良い。9は口縁部下に4条のへら描き沈線、口縁端部下端に浅い刻目が施される。内外面ともにナデ調整となる。にぶい黄橙色を呈し、焼成はやや良い。10も口縁部下に4条のへら描き沈線が巡らされるが、上から4条目の沈線はハケ調整によってやや不明瞭となっている。口縁端部下端に浅い刻目が施される。外面は灰黄褐色、内面はにぶい黄橙色を呈し、焼成は良い。11は口縁部下に3条のへら描き沈線、口縁端部下端に刻目が施される。胴部内面半ばに粘土帯の接合部が確認でき、器壁がやや薄くなっている。灰褐色を呈し、焼成はやや良い。12は口縁部下に浅い1条のへら描き沈線、口縁端面全体に深い刻目が施され、口縁下端が波状に変形している。にぶい褐色を呈し、焼成は良くない。13は口縁部下に4条のへら描き沈線が描かれるが、4条目の下端がナデ消されている。口縁端部下端の刻目は強く押捺され、下端が波状に変形する。胴部内面半ばに粘土帯の接合部が確認でき、器壁がやや薄くなっている。外面は黄灰色、内面はにぶい黄橙色を呈し、焼成はやや良い。14は口縁部下に4条のへら描き沈線、口縁端部全面に刻目が施される。にぶい黄橙色を呈し、焼成は良い。15は口縁端部下端に刻目が施される。外面はにぶい黄褐色、あるいはにぶい褐色、内面はにぶい黄橙色を呈し、焼成は良い。

第5図16は口縁部下に3条のへら描き沈線、口縁端部下端に浅い刻目が施される。外面口縁部下には指頭圧痕が残る。灰褐色～黒褐色を呈し、焼成は良くない。17～20はいずれも小型の甕で口縁下に浅い1条のへら描き沈線文が巡る。17はにぶい黄褐色を呈する。これも焼成は良くない。18は口縁端部下端に深い刻目が不規則に施される。外面はにぶい褐色、内面は灰黄褐色を呈し、焼成はあまり良くない。19は口縁端面下半にやや深い刻目が施される。灰黄褐色を呈し、焼成はとても良い。20は口縁端面下半にやや深い刻目が施される。黒色を呈し、焼成はやや良い。21は口縁端部下端に浅い刻目が施される。外面は灰褐色～灰黄褐色、内面はにぶい黄橙色を呈し、焼成は良い。22は無文の手捏ねである。外面には口縁部下から胴部にかけて刻目のようなものが入るが、焼成時のひび割れと考えられる。にぶい黄褐色を呈し、焼成は良い。



第5図 中山貝塚出土中山I式甕形土器 土器番号16～22 (1/4)



第6図 中山貝塚出土中山I式甕形土器 土器番号23～37 (1/4)

第6図23は口縁端部下端に浅い刻目が施される。口縁部下には粘土帯の接合部と考えられる線状痕が残り、浅い段ができています。灰褐色を呈し、焼成はやや良い。24は口縁部下に3条の沈線が巡らされる。口縁端部の大部分が欠損しているため、刻目の有無は不明である。外面は灰褐色～にぶい黄橙色、内面はにぶい橙色を呈し、焼成は良い。25は口縁部下に4条のヘラ描き沈線、口縁端部下端に浅い刻目が施される。外面は灰褐色、内面はにぶい黄橙色を呈し、焼成は良い。26・27は無文のものである。26の外面は灰褐色、内面は明赤褐色を呈し、焼成は良い。4と接合し、同一個体である。27の外面は灰黄褐色、内面はにぶい黄橙色やにぶい橙色を呈し、焼成は良い。28は口縁部下に4条のヘラ描き沈線が施される。一番上の沈線は口縁直下の貼り付け突帯によって覆われており、沈線を施文した後に突帯を貼り付けたことがわかる。また突帯欠損部分の器面に沈線らしき横線が確認できることから、もともと沈線は5条巡らされていた可能性がある。口縁端部下端と貼り付け突帯上面に浅い刻目が施される。外面はにぶい黄褐色・暗褐色、内面はにぶい褐色を呈し、焼成は良い。他に類例のない特徴をもつものの、沈線4条のものとして中山I式土器に準じて掲載した。29は口縁部下に4条のヘラ描き沈線、口縁端部下端に浅い刻目が施される。頸部の沈線直下まで顕著なヘラミガキがみられる。浅黄橙色を呈し、焼成は良い。接合はしないが、その特徴から

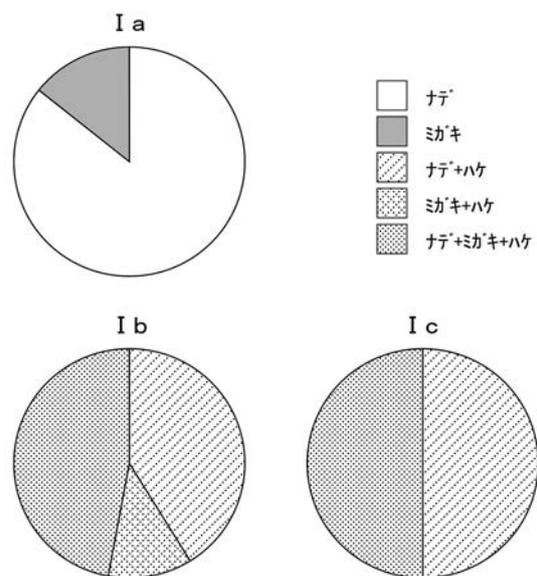
9 と同一個体の可能性がある。30は口縁部下に2条のへら描き沈線、口縁端部下端に深い刻目が施される。外面には沈線直下まで不整方向のハケ調整がみられる。にぶい黄橙色を呈し、焼成は良い。31は口縁部下に3条のへら描き沈線、口縁端部下端に刻目が施される。にぶい黄橙色を呈し、焼成は良くない。32は口縁端部下端に深い刻目が施される。灰色を呈し、焼成は良くない。33は口縁部下に4条のへら描き沈線が、口縁端部下端に浅い刻目がやや不規則に施される。外面は灰褐色、内面は黄灰色を呈し、焼成はあまり良くない。34は口縁部下に4条のへら描き沈線とその直下に列点文が施される。外面は灰黄褐色、内面は灰褐色を呈し、焼成はやや良い。35は口縁部下に3条のへら描き沈線、口縁端部下端に刻目が施される。にぶい黄橙色を呈し、焼成は良い。36は口縁端部下端に浅い刻目が施される。口縁部下に上部2条、下部2条の沈線が巡らされ、その間にへら描きによる鋸歯状の山形文が施されている。外面は黒褐色、内面はにぶい黄橙色を呈し、焼成はやや良い。37はその特徴から36と同一個体の可能性があるもので、同様に刻目、上部2条の沈線と鋸歯状の山形文が認められるが、下部のへら描き沈線の数は不明である。外面はにぶい黄橙色、内面は浅黄色を呈し、焼成は良い。

4. 中山 I 式の細分案

先述したように、中山 I 式甕形土器は基本的には沈線の条数をもって中山 II 式と区別されてきた（松崎・潮見 1961、潮見 1987）。しかし、今回資料紹介にあたって、へら描き沈線をもたないものを含め、土器調整の過程において特徴的なまとまり（第7図）を見ることができたため、ここにその細分案を提示する。

(1) I a 類（第4図12、第5図16・17・18・20、第6図31・32）

口径が14～20cm前後となる中・小型の甕形土器である（第8図）。口縁部は如意型に開き、口縁部下には1～3条のへら描き沈線を有するが、沈線をもたないものも含める。器面の調整方法は、外面・内面ともに丁寧なナデ調整によって仕上げられており、弥生土器に一般的に見られるハケ調整の痕跡がみられない。また、焼成は悪く、器表が黒あるいは黒褐色から灰色を呈すという特徴も備えている。ハケ調整の欠如と、器表の色調（焼成度合）が分類の指標となる。



第7図 細分類ごとの器面調整の種類

(2) I b 類（第4図1～7・10・13～15、第6図25～27・30・33・35）

口径が16～33cm、中・大型の甕形土器である。口縁部が如意型を呈するが、端面の刻目は角度を持ち、細かく下端に施すものと両端に届くように浅く長く施すものがある。へら

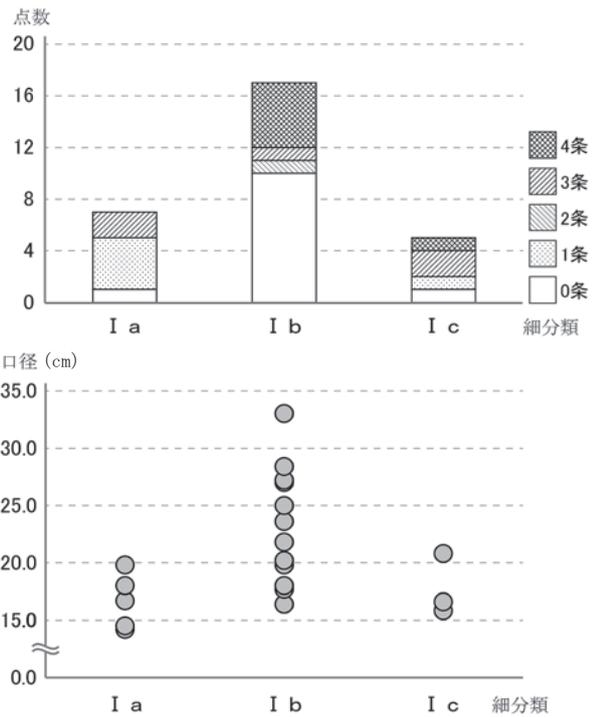
描き沈線のあるものはほとんどが4条巡らされ、ナデ、ハケ、ヘラミガキの痕跡を明瞭に残している。焼成はよく、器表面は鮮やかな明褐色や赤褐色を呈している。この器表面の色調と、外面ハケ調整の有無がI a類との最大の相違点となる。

(3) I c類 (第4図11、第5図19・21、第6図24・36・37)

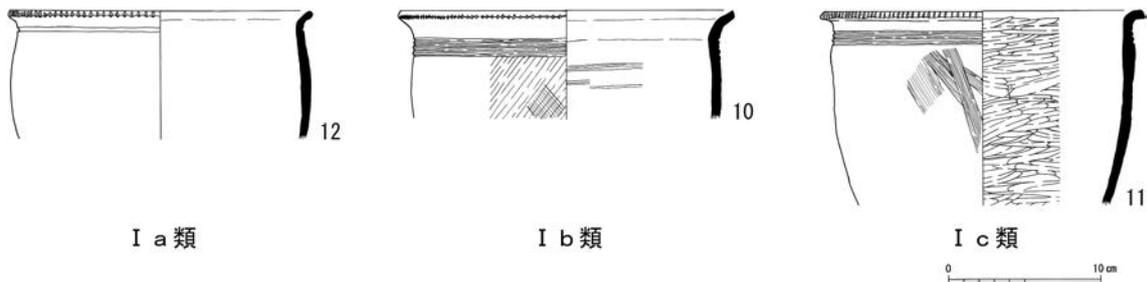
資料が少なく、不確定な部分も多いが、口縁部の屈曲が強く、中山II・III式との形態的な類似性がみられる。端面には刻目が施されるが、浅く細かく刻まれただけのものが多く、意匠化への傾向が窺える。頸部の沈線1～4条、明瞭なハケ調整を施す点ではI b類と同様の様相を示しており、口縁部逆L字型を志向した形態がI b類との相違点となる。口縁を下にし、倒立させて成形した可能性さえ窺えよう。

以上述べたI a類～I c類までの分類と、形式的に前後すると考えられる土器群、すなわち、縄文晩期土器として位置付けられてきた中山B式土器、および弥生時代前期後半に位置付けられる中山II式との関係について述べる。中山B式土器は良好な遺存状況のものが少ないが、器面は黒灰色から黒灰褐色あるいは一部橙褐色で、丁寧なナデ調整によって仕上げられており、ハケ調整は施されてはいない。大きく深い刻目や色調、器面の調整方法においてI a類により近似した様相を示している。中山II式土器は、色調が明褐色から赤褐色を呈し、口縁部が如意型あるいは弱い逆L字型を示し、端部に小さく浅い刻目が細かく刻まれ、体部にはハケ調整痕跡が明瞭に確認することができる。色調や焼成度合、口縁部形態や器面の調整方法において、I b・I c式と類似した製作過程を示している。

以上の点からすれば、今回細分したI a～I c類の土器群は、中山B式との関連が窺えるI a



第8図 細分類と沈线条数および口径との関係



第9図 中山I式甕形土器細分類案 (1/5)

類から、中山Ⅱ式と同様の特徴を有するⅠb類・Ⅰc類へという時間的な前後関係として捉えられる可能性がある（第9図）。ハケ調整が弥生文化と共に大陸から伝えられた土器整形技法であるという評価（横山 2003）を考慮すれば、Ⅰb式・Ⅰc式の登場は当該地域における新しい文化伝播の一つの画期として捉えられるかもしれない。しかし、詳細な層位的検証ができない以上、綿密な型式学的分析が不可欠であるが、今回の検討では、明確な前後関係を示すことはできなかった。

中山貝塚では、瀬戸内地域における前期前葉（Ⅰ-1様式）の特徴である肩部に段手法が認められる甕形土器は出土していない。その一方、縄文晩期土器とされてきた中山B式土器と、前期中葉（Ⅰ-2様式）に位置付けられる中山Ⅰ式土器は連続した層位関係をもって出土しており、Ⅰ-1様式の土器には突帯文土器が伴う場合が多いという瀬戸内地域の特徴と併せて考えても（柴田 2011）、広島湾岸地域における弥生土器の定着は他地域より一段階遅れていた可能性が考えられよう。

5. おわりに

中山貝塚は環壕集落として成立した福山市大宮遺跡・亀山遺跡などと異なり、壺形土器の構成比率が貧弱であり、甕形土器に偏重した特異な土器様式をみせている。海浜が後退し、汽水化していった当該集落近辺の環境変化からみれば、土器型式の伝来よりも農耕による計画経済への移行が遅れていた可能性もあるかもしれない。現時点ではそこまで言及することはできないが、中山Ⅱ式やⅢ式、そして周辺地域における土器群の紹介も含め、今後検討すべき課題としたい。

なお、今回の紹介の土器実測図挿図はこれまで実習授業に参加してくれていた考古学専攻の大学院生によるものである。「はじめに」、「中山貝塚をめぐる調査研究」、「おわりに」は野島が、「中山Ⅰ式の細分案」については藤井翔平（現、岡山県古代吉備文化財センター）が中心となってそれぞれ執筆した。「中山Ⅰ式土器を中心とした甕形土器の資料紹介」については、土器1～7の観察記載を市川伯博、土器8～15を平尾英希、土器16～26を森本直人（現、岡山県古代吉備文化財センター）、土器27～37を藤井が分担して行った。また、野島と市川が土器実測図以外の図表を作成して全体の文体を調整した。

註

- (1) これらの一連の作業は広島大学大学院文学研究科地表圏システム学講座の考古学の専門課程を履修した大学院生がおこなってきた。なお、2013年度は広島大学文学研究科に所蔵されているイラン青銅柄鉄剣の観察と実測を行い、その調査成果を公表した（野島・有松ほか 2014）。

2006年 土器整理、総番号添付。

2007～2010年度 実測・レイアウトおよび土器観察表作成。

2011～2012年度 トレースおよび土器観察表修正。

2014年 中山Ⅰ式甕形土器写真撮影。

- (2) 広島大学が東広島市に移転したため、これまで作成されてきた土器実測図と実物の対応ができなくなっ

ていた。作成されてきた実測図に整理番号を付して、実物と対応させていったが、同一個体として接合したものもあり、難渋な作業となった。なお、広島大学考古学研究室保管以外の土器については、写真撮影を行い得なかった。

引用・参考文献

- 秋本和江・岩本八智子ほか編 1960 『二葉風土記 中山貝塚』広島市立二葉中学校生徒会社会科クラブ。
- 伊藤 実 1992 「安芸地域」『弥生土器の様式と編年—山陽・山陰編—』木耳社、239～315頁。
- 潮見 浩 1987 「広島県 中山貝塚」『探訪 弥生の遺跡』西日本編、有斐閣出版、336～341頁。
- 柴田昌児 2011 「中四国西部地域」『講座日本の考古学5 弥生時代』上、青木書店、165～200頁。
- 妹尾周三 2000 「「中山B式土器」について」『突帯文と遠賀川』土器持寄会論文集刊行会、299～330頁。
- 野島 永・有松 唯・藤井雅大・村田 晋・市川伯博・藤井翔平・森本直人 2014 「広島大学考古学研究室所蔵の西アジア青銅柄鉄剣をめぐって」『広島大学大学院文学研究科考古学研究室紀要』第6号、広島大学大学院文学研究科考古学研究室、139～165頁。
- 藤尾慎一郎 1987 「稲作受容期の甕形土器研究」『東アジアの考古と歴史』中、岡崎敬先生退官記念論集、293～323頁。
- 松崎寿和・潮見 浩 1961 「広島県中山貝塚」『日本農耕文化の生成』本文篇、日本考古学協会、263～273頁。
- 家根祥多 1984 「縄文土器から弥生土器へ」『縄文から弥生へ』帝塚山考古学研究所、49～78頁。
- 横山浩一 2003 「刷毛目調整工具に関する基礎的実験」『古代技術史攷』岩波書店、3～30頁。
- 吉野益見 1925 「広島附近の貝塚」『考古学雑誌』第15巻第1号、51～55頁。

Examples of Artifacts from the Nakayama Shell Midden: Nakayama I type Rice Kettle Ceramics

Hisashi NOJIMA, Shohei FUJII, Hakuhiro ICHIKAWA,
Naoto MORIMOTO, Hideki HIRAO

The Nakayama Shell Midden site dates from the Final Jomon to the Middle Yayoi period, and is located in the vicinity of Hiroshima City, Hiroshima prefecture. Artifacts excavated from this site are known as “Nakayama-style pottery”, and are representative of this time period. Here, we report on the Nakayama I type pottery of the first half of the Early Yayoi period, and present a plan for subdividing it into classes. This classification scheme makes it possible to understand the nature of the transition from the Nakayama B type pottery of the Final Jomon, to the Nakayama II type pottery of the latter half of the Early Yayoi period, suggesting a temporal and successive continuity.

第1表 中山I式甕形土器観察表

土器番号	整理番号	調査区	出土層位	沈線条数	細分類	器高 [現存高] (cm)	口径 [復元径] (cm)	調整		色調		造岩鉱物
								外面	内面	外面	内面	
1	1028	A6	2S	0	I b	[15.0]	[33.0]	ハケ→ミガキ	ハケ→ミガキ			
2	1033			0	I b	[11.5]	[27.0]	ハケ→ミガキ	ミガキ			
3	1207	A6	2S	0	I b	[12.4]	[27.2]	ハケ→ナデ	ハケ→ナデ →ミガキ	10YR6/4	10YR6/4	φ1-3mm長石若干
4	1023	E5		0	I b	[13.0]	[25.0]	ミガキ・ナデ	ハケ→ミガキ →ナデ	7.5YR5/2	2.5YR5/6	φ1-2mm石英・長石
5	1209	A6	2S	0	I b	[10.3]	[23.6]	タテハケ→ ナデ	ナデ→ハケ	10YR5/4	2.5Y6/3	φ1-2mm石英・長石
6	1202			0	I b	[6.3]	[19.8]	ハケ→ナデ	ナデ→ミガキ	10YR4/1	2.5Y5/2	φ1mm以下石英・長石
7	1020	A6	2S	0	I b	[15.9]	[20.2]	ナデ→ハケ →ミガキ	ナデ・ハケ →ミガキ	10YR6/4~ 7.5YR6/6	10YR6/4~ 7.5YR6/6	φ1-3mm石英・長石
8	1203			3		[5.5]	[23.7]	ナデ	ナデ→ミガキ	10YR4/1~ 6/3	2.5Y7/2	φ1mm以下長石
9	1158	E2		4		[9.7]	[22.0]	ナデ・ミガキ	ナデ	10YR6/4~ 5/1	10YR6/4	φ1-3mm石英・長石
10	1159	E3		4	I b	[7.2]	[21.8]	ヨコナデ→ タテハケ	ヨコナデ	10YR5/2	10YR6/4	φ1-2mm石英・長石 微小な金雲母
11	1026			3	I c	[12.9]	[20.8]	ハケ・ナデ	ハケ→ミガキ	5YR4/1~ 5/6	5YR4/1~ 10YR6/4	φ1-3mm石英・長石多 微小な金雲母
12	1201	A8	カキ	1	I a	[8.5]	[19.8]	ナデ	ナデ	7.5YR5/4	7.5YR5/4~ 10YR5/1	φ1-2mm石英・長石
13	1027	E4		4	I b	[13.9]	[17.7]	ハケ→ナデ	ナデ	2.5Y6/1	10YR7/2	φ1-2mm石英・長石 微小な金雲母若干
14	1157	B		4	I b	[8.3]	[16.4]	ナデ→ハケ	ナデ	7.5YR6/4	7.5YR7/4	φ2-4mm石英・長石
15	1258			0	I b	17.5	[18.0]	ハケ→ナデ・ ミガキ	ナデ・ハケ →ミガキ	10YR5/4~ 7.5YR5/4	10YR6/4	φ1-3mm石英・長石
16	586 584	A7	1S	3	I a	[8.2]	[18.0]	タテナデ→ ヨコナデ	ヨコ板ナデ →ヨコナデ	7.5YR6/2~ 3/1	5YR5/2~ 3/1	φ1mm以下長石多
17	1210	B		1	I a	[9.8]	[14.5]	ミガキ	ミガキ	10YR5/3	10YR5/3	φ5mm石英・長石多
18	545	A6	2S	1	I a	[4.0]	[16.7]	ナデ	ナデ	7.5YR5/4	10YR5/2	φ1mm長石少
19	1205	A7		1	I c	[4.5]	[15.8]	ナデ・ハケ	ハケ→ナデ	10YR5/2	10YR5/2	φ1-2mm長石多
20	1250	A8	ハマグリ	1	I a	[10.1]	[14.2]	ナデ	ナデ	2.5Y2/1	2.5Y2/1	φ1-2mm石英・長石多
21	549	A6	2S	0	I c	[7.2]	[16.6]	ナデ・タテハケ →ミガキ	ヨコナデ→ ハケ→ミガキ	10YR4/1~ 4/2	10YR6/3	φ1-2mm長石少 微小な金雲母若干
22	1256			0		12.0	11.4	ナデ	ハケ→ナデ	7.5YR6/6~ 10YR5/4	10YR5/4	φ1-3mm石英・長石多 微小な金雲母若干
23	600	A8		0		[11.3]		タテナデ→ ヨコナデ	ナデ	10YR7/1~ 5/1	10YR6/1	φ2-3mm石英・長石
24	536	A5	1S	3	I c	[8.2]		ハケ→ナデ	ナデ→ミガキ	10YR4/1~ 6/3	7.5YR6/4	φ1-2mm石英・長石多
25	322	A6	2S	4	I b	[13.2]	[28.4]	タテハケ→ ヨコナデ	ナデ	7.5YR5/2	10YR7/2	φ1-3mm石英・長石多
26	40	A8	カキ層	0	I b	[13.2]		ハケ→ナデ・ ミガキ	ナデ・ハケ →ミガキ	7.5YR5/2	2.5YR5/6	φ1-3mm石英・長石多
27	317	A6	2S	0	I b	[9.3]		ナデ→ミガキ	ハケ→ミガキ →ナデ	10YR4/2	10YR6/3~ 7.5YR6/4	φ3-5mm長石少 微小な金雲母
28	1143	A8	ハマグリ	4		[6.0]	[26.0]	ナデ→ハケ →口縁ナデ	ナデ	10YR5/4~ 3/3	7.5YR5/4	φ1-2mm長石少 微小な金雲母多
29	599	E2		4		[7.9]		ヨコナデ→ タテミガキ	ヨコナデ	7.5YR8/3	7.5YR8/3	φ2mm石英・長石多
30	17	A8		2	I b	[9.7]		ナデ・ハケ	ナデ・ハケ	10YR6/3	10YR6/3	φ1-2mm石英・長石
31	295	A6		3	I a	[8.2]		ヨコナデ	ヨコナデ	10YR5/1	10YR6/4	φ2mm以下石英・長石多 微小な金雲母多
32	11	A8		0	I a	[5.5]		ナデ	ナデ	2.5Y2/1~ 4/1	10YR6/3	φ1mm石英・長石多
33	116	A		4	I b	[5.6]		ハケ→ナデ	ナデ・ミガキ	10YR4/1	2.5Y5/1	φ2mm以下石英・長石 微小な金雲母
34	125	A52S		4		[6.1]		ナデ	ナデ→ミガキ	10YR5/2	10YR4/1	φ3-5mm石英・長石多 微小な金雲母
35	114	A		3	I b	[7.0]		ハケ→ナデ	ナデ	10YR7/2	10YR6/4	φ1mm以下石英・長石 微小な金雲母
36	47	A-8	1具	4	I c	[6.0]		ハケ→ナデ	ハケ→ナデ	5YR3/1	10YR7/3	φ1-2mm石英・長石
37	51	A-8	1具	2+	I c	[3.8]		ハケ→ナデ	ハケ→ナデ	10YR7/2	2.5Y7/3	φ1-2mm石英・長石



a. 中山 I 式甕形土器 (土器番号 7)



b. 中山 I 式甕形土器 (土器番号 15)

広島市中山貝塚出土遺物の資料紹介

図版第 2



a. 中山 I 式甕形土器 (土器番号20)



b. 中山 I 式甕形土器 (土器番号22)



a. 中山 I 式甕形土器 (土器番号 3 ~ 5)



b. 中山 I 式甕形土器 (土器番号 6・8・12)

広島市中山貝塚出土遺物の資料紹介

図版第 4



a. 中山 I 式甕形土器 (土器番号 9・10・14・16・18・19)



b. 中山 I 式甕形土器 (土器番号 11・13)



a. 中山 I 式甕形土器 (土器番号17・21・23・24)



b. 中山 I 式甕形土器 (土器番号25・26)

広島市中山貝塚出土遺物の資料紹介

図版第 6



a. 中山 I 式甕形土器 (土器番号27 ~ 31)



b. 中山 I 式甕形土器 (土器番号32 ~ 37)